

福知山 AtoZ シリーズ「丹波の漆かき AtoZ」

発行日 2019年3月25日

制作 NPO法人丹波漆
<http://www.tanbaurushi.org>

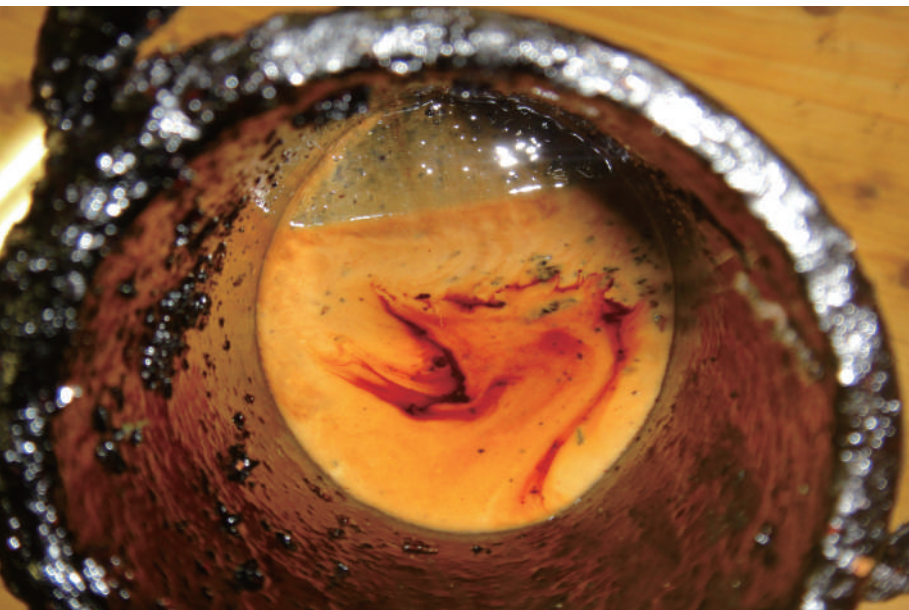
協力 (写真提供)
出水伯明
齋藤株式会社
福知山市 やくの木と漆の館

デザイン 藤井 麻



発行 福知山AtoZ研究室
(福知山公立大学 塩見直紀研究室内)
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370

この冊子は京都府地域力再生プロジェクト支援事業交付金を活用して制作しました。



福知山 AtoZ シリーズ

丹波の漆かき

AtoZ

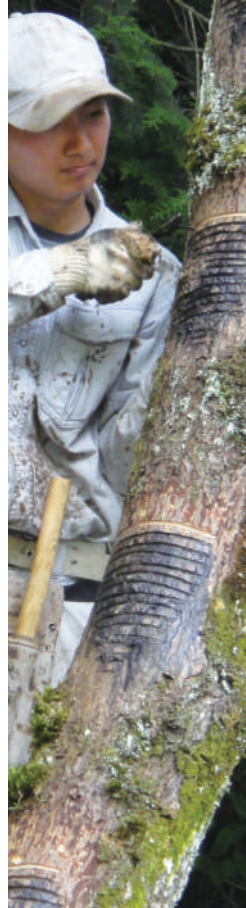


全国の漆産業が衰退していく中で、夜久野の漆が残ってこれたのは、衣川光治(1911-94)という一人の男の尽力によるものだった。彼は1948年に「丹波漆生産組合」を立ち上げ、苗木の育成から植林、生産と、丹波の漆産業を支えた。その後、僅かに残った人間たちで、丹波固有の生産技術にこだわった活動を続け、今も、漆掻きの技術がNPO法人丹波漆に引き継がれている。

ウルシの木に傷をいれてその傷から掻き取るように樹液を取るのを、漆液を採取する仕事を漆掻きという。10年以上育った木から漆掻きをする。6月の初めごろから9月の終わりごろまで4日に一度ずつ「カンナ」と呼ばれる独特の刃物で傷を入れていく。

最初小さな傷だったものを、徐々に長さを延ばすと共に傷の数を増やしていく。「カンナ」で傷を入れてすぐに滲んできた漆液をすかさず、「ヘラ」と呼ばれる先が曲がった平たい匙のようなもので掻き取って「筒」に入れていく。

採れる時季によって漆の質がちがうので、「初漆」「盛り漆」「遅漆」と分けて保存する。6月から9月の間、1本の木から採取される漆の量は平均してコップ一杯(約200cc)程度。



contents

A AI
アイ

B BUNKON
分根

C CITIBUZAKI
七分咲き

D DOUGU
道具

E EGURI
エグリ

F FENCE
フェンス

G GOHYAKUNIN
五百人

H HATSUURUSHI
初漆

I IKIMICHI
生き道

J 10NEN~15NEN
十年から十五年

K KANNA
カンナ

L LEAF
ウルシの葉

M MITUJI KINUGAWA
衣川光治

N NAKAGAININ
仲買人

O OSOHEN
遅辺

P POISON
毒

Q QUALITY
品質

R ROU
漆蟻

S SAKARIHEN
盛り辺

T TANBA1GOU
丹波一号

U UERUKAMU
うえるかむまつり

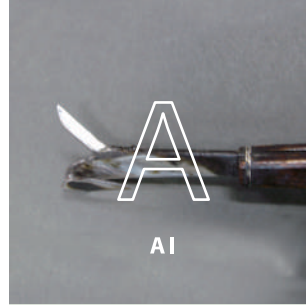
V VOLUNTEER
ボランティア

W WEIGHT
重さ200g

X XYLEM
木部

Y YAGURA
ヤグラ

Z ZASSOU
雑草



漆掻き道具の中でも最も重要な道具「カンナ」。その先端の一部分に「アイ」と呼ばれる部分があります。先にカンナのU字になった刃で樹皮に溝をつけ、次に溝の底にアイで更に深く切れ込みを入れます。傷付けられてできた樹皮の断面から、漆が染み出てきます。

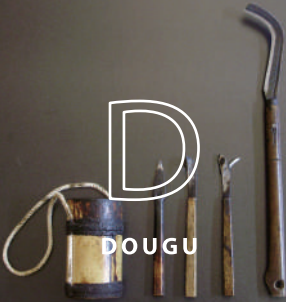


分根と呼ばれる方法で漆の苗を増やします。春に15cm程に切ったウルシの根っこを土に埋めておくと、梅雨明け頃までにそこから新たに芽吹いてきます。根っこを切り取った木と全く同じ遺伝子を引き継いだ苗が生まれるので、特定の品種の苗を増やすのに適しています。



5月末から6月初め頃、漆の花が七分咲きになると漆掻きを始める時期の合図です。房状についた黄色くて小さい花がたくさん咲きます。この時期は、桜前線が通過して55日先とも言われます。この時期を境に、9月末頃まで4日毎に傷を入れる漆掻きが始まります。

七分咲き



D

DOUGU

カンナ、ヘラ、皮むきカマ、エグリ、筒、筒くり、セシメ包丁、セシメベラ…。筒や、道具の柄を自分の使いやすい様に作るのも漆掻き職人の仕事です。

漆掻き道具



E

EGURI

裏掻きと止め掻きの道具。
裏掻きと止め掻きは10月頃行われ、漆掻きの最後に木に残った漆を採りきる作業です。
エグリを使うことで、冬に向けて硬くなった樹皮を素早く剥く事が出来ます。

エグリ



F

FENCE

近年問題になっている、シカ・イノシシによる農作物への被害。ウルシも例外ではありません。むしろウルシはシカの好物で、幹を齧られたりして枯れてしまうこともあります。このため漆植栽地には獣害防止フェンスが絶対に必要です。

フェンス



G

GOHYAKUNIN

漆掻きの最盛期である明治期、夜久野町を含む牧川流域には約500人の漆掻き職人がいたと言われます。この頃は、丹波地域のみならず北陸や山陰まで出稼ぎに行って漆を掻いたそうです。

五百人



H

HATSUURUSHI

漆掻きを始めて3辺目までは、傷を入れるだけで漆を採りません。これは木に漆を作らせるためのならし期間と言われます。4辺目以降に採れだす漆が初漆は水分が多く、白っぽく粘り気が強いです。乾きが早いので、用途によっては重宝されます。

初漆



I

IKIMICHI

「生き道」は漆掻きの途中で木を枯らさずに生かしておくために、傷を付けずに残しておく筋。漆掻きは、4日ごとに何回も樹皮に傷をつけ、それにより木に漆を作らせながら採取します。このために、木に負荷をかけつつも、完全に水や養分の通り道を断ち切らない、「生き道」が必要になります。

生き道



10NEN~15NEN



KANNA



LEAF



MITUJI KINUGAWA



NAKAGAININ



OSOHEN

ウルシの苗を植えてから、木が漆掻きのできる大きさに成長するまでに10年～15年の期間がかかります。この間、下草刈りや病害虫対策、肥料散布などの世話をします。幹の直径が20cm位になる頃ようやく漆掻きが出来ます。漆掻きが終わると切り倒し、芽吹いてくる「ひこばえ」から漆が掻けるよう、また何年もかけて育てます。

十年から十五年

掻き溝を切るために幅5mmほどのU字型に曲がった刃がついています。刃の背にはアイが付いています。漆掻きの必需品ですが、最近はこの特殊な刃物を作る事の出来る鍛冶職人が大変少なくなり、その後継者の育成も課題となっています。

カンナ

ウルシの葉っぱは羽状複葉と呼ばれる形をしています。同じウルシ科の仲間のハゼ、ヌルデ、ヤマウルシ等と形が似ていますが、漆が取れるのはウルシだけ。秋になるとウルシは黄色に紅葉します。そして春のウルシの新芽を天麩羅にするととても美味しいです(カブレる恐れあり)

ウルシの葉

全国で漆掻きが衰退する中で、夜久野に丹波漆が残ったのは、衣川光治(1911-94)の尽力によるものでした。丹波漆の生産技術、漆掻きの産業を残すため、組合を立ち上げ、苗木育成、植栽、後進の育成に取り組みました。衣川光治の書き残した漆掻きに関する膨大な文章は、丹波漆のバイブルです。

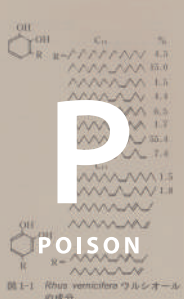
衣川光治

漆掻きが盛んに行われた時代、夜久野町の日置地区に漆の仲買人がいて、その儲けで蔵が立ったと言われます。当時は10月の額田地区のお祭りが終わった頃、旅館「板分」で漆の市が立ち、漆は京都・大阪へ運ばれました。現在、丹波漆は京都の文化財修復や漆芸作品の制作に使われています。

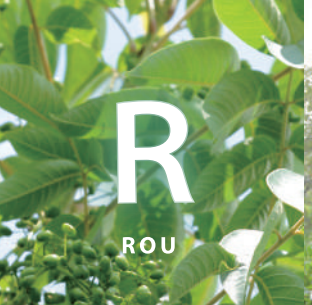
仲買人

秋に近づき気温が下がり、盛りが過ぎた後が遅辺の漆です。漆の粘度が高くなり、盛り漆と比べると初漆に近い物に戻ってきます。この頃にはウルシにも随分疲れが出て、葉が黄色く変わったり、漆の出が悪くなる事もあります。最後まで掻ける様、それに合わせて日数の間隔を変えるなど調整をします。

遅辺



Q
QUALITY



R
ROU



S
SAKARIHEN



T
TANBAIGOU



U
UERUKAMU

毒

漆が皮膚につくと「カブレ」ることがあります。漆が引き起こすアレルギー反応です。葉っぱを舐めたりすると樹液が付いてカブレることもあります。体質によってカブレにくい人とそうでない人がいます。漆掻き職人はカブレやすい人でも、何回もカブレることで徐々にカブレにくい体になります。

品質

古くから丹波漆は京都の漆職人の間で質の良い漆として重宝されていました。特に、透け(透明度)が良く、のびが良いと言われます。透けが良い事で、木地に摺り込むと木目が際立ち、顔料を混ぜても発色の良い色漆が出来ます。のびが良い事で、少ない量でも薄く均一に塗ることが出来ます。

漆蝋

実は、昔はウルシの実から蠟燭の原料になる「漆蝋」も取っていました。幹からは漆塗りに、実からは蠟燭に必要なものが得られる、利用価値の高い樹木でした。そのため「ウルシが鹿に食われたら植えなおすように」とお殿様から指示が出された時代もあったそうです。

盛り辺

7月に入り梅雨が過ぎた頃から、漆の量・質ともに最も良い時期に入ります。この時期の漆を盛り辺と呼びます。盛り漆は粘度が低くさらさらしており、傷を付けた途端に「コシル」と呼ばれる透明の液体が噴き出すようになってきます。これを溢さない様、素早く作業せねばなりません。

丹波一号

衣川光治氏が昭和30年代、夜久野に生えていたウルシの中から選んだ品種。良質な漆が多く採れます。現在も丹波1号などの品種を苗畑で増やし、植栽を行っています。

うえるかむまつり

丹波漆では、毎年11月に植樹祭「うえるかむまつり」を開催し、参加した方々の手でウルシの苗を植えて頂いています。現在、皆様のご協力の下で植栽本数は約1000本となりました。



VOLUNTEER



WEIGHT



XYLEM



YAGURA



ZASSOU

丹波漆の活動の多くが、丹波漆の再生を願い、活動に賛同して頂いた方々の協力により成り立っています。漆の文化を残す為に、みんなの力で植え、育て、掻き、価値を発信する事を大切にしたいです。

ボランティア

1本のウルシの木から約200gの漆を採取することができます。牛乳瓶1本分くらいです。木の大きさや、漆掻き職人の腕などによって採れる量が変わります。

重さ200g

ウルシの木部は綺麗な黄色です。チップにして草木染めの原料、灰にして陶芸の釉薬などに使えます。軽くて柔らかく、水に強いので、烏賊釣りの餌木やウキに使用されたりもします。

木部

大きな木で漆を掻くときは、地上2m~3mの高さまで傷が付けられるよう、ヤグラを立てます。しかし漆の出る量は葉っぱの量に比例すると言われていて、高いところまで掻けばその分沢山出るといってもいいのです。

ヤグラ

ウルシは雑草に埋もれてしまったり、蔦が絡まったりすると弱ってしまうので、年に数回は漆植栽地の下草刈りが必要です。きつく、地味ですが重要な作業です。

雑草

ウルシノキを増やすための活動にご協力ください!

サポーター会員	3,000円
賛助会員	10,000円
賛助会員(団体)	30,000円

連絡先
info@tanbaurushi.org

HP
http://www.tanbaurushi.org





少なくなった漆樹を増やすため、植栽面積を増やしていく。
10年程の間ずっと管理し育てるのは、
山登りのような遥かな道のりだ。
限られた予算、人員の中での活動は思うようにいかず、
近年では鹿などの食害にも悩まされるなど、
課題はまだ多い。

この貴重な丹波漆の生産技術を後世の人々に、
いかにして伝えていくのか—。

大きな問題に立ち向かいながら、
丹波の漆掻き職人たちは、今日も作業を続けている。

